
月好きの日常

咲坂 美織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月好きの日常

【NZコード】

N4142X

【作者名】

咲坂 美織

【あらすじ】

私は月が好き。名前に月が2つも入ってるからかもしれないけど。ある日私が月を眺めていると、一人の小さな男の子がやってきた。どうやらこれでも同じ年らしい。

明日からの高校生活が何だか楽しいものになる予感がした。

せじゅましほ（前書き）

私はある日突然（しかも受験勉強中に）あることを思つた。

“田常を小説にしたらどうなるんだろう?”

事件があるから物語になるのであって、田常は事件がないから物語にはならない。
……誰が決めた、そんなこと。

田常だって、事件であふれているではないか！

はじめまして

今にも日が沈みそうな夕暮れ。私は一人、町はずれを日指して歩いていた。

「うーん、今日もいい天気。でも早くしないと日が暮れちゃうな」

そう言いながらもゆつたりと歩く。

日の光が完全に消えたころ、私はゆっくりと歩みをとめた。日の前には古い雑居ビルがあった。

周りに人が居ないのを確認して、そつと中へと体を滑り込ませる。思ったよりも遅くなつたから、近くにある階段を駆け足で上つていく。

「間に合つたかな」

階段の一番上にある屋上へと続く扉を開けると、日の前に柔らかい光がふわりと広がつた。

「……うん、今日もきれいだな」

日の前に浮かぶ丸い月。明るくて大きな月。昨日とは違つ、そして明日もきっと違う顔を見せるであつづ月が視界いっぱいに広がつている。

屋上の真ん中に膝を抱えて座りながら、ぼーっと月を見上げた。きっと明日にはまた違う顔が見られるんだろうな、なんて思いながら。

その時、後ろにある扉からギギッという微かな音が聞こえてきた。今まで6年間ずっとここで月を見上げてきたけど、私以外の人がここに来るなんて初めてだ。

ゆっくり振り返ると、そこには小柄な人影が見えた。
身長はたぶん私と同じか、少し低いくらい。

「あれ、先客がいたか」

そう言いながら小柄な人影は私のそばにゆっくりと歩み寄ってきた。やっぱり身長は私のほうが少し高いみたい。

「女の子がこんなに夜遅くに一人か。あんまり良くないんじゃないの？」
「そっちじゃ、子供がこんな夜遅くに一人でいちゃいけないんじゃないの？」

「子供って、おい！俺こいつ見えても明日から高校生だぞ！」

「えつ、嘘

「……嘘じゃねえって。そんなにマジでびっくりしなくとも……」

そういうと、一人でブツブツ、やっぱり俺って小さいか、とか、どうせ俺はチビですよ、とか言い出した。
どうやら身長が低いことはコンプレックスだつたらしい。

「えつと、実はさ、私も明日から高校生なんだよね
「嘘……。俺、同じ年の女の子にも負けたのか……。コホン、すごい偶然だな」

あー、最後ちょっと棒読みになつた。言わないほうが良かったか

な。

「……まあ、しゃあないか。今に始まつたことじやないし……。俺、
陽平つていうんだ。もしかしたら同じ学校かもしけないし、一応挨拶！」

「私は美月。^{みつき}美しい月、つて書くの」

「へえ、美月か。まるで今日の月みたいだな」

「私あんなに綺麗じやないよ」

見ず知らずの人にお名前を教えるなんて、今日の私はどうしちゃつたんだろう。私がおかしくなつてしまつたのは、陽平君が優しい雰囲気を出してくれていたからなのか、月のやわらかくて優しい光のおかげなのか、よく分からない。

でも、確かに覚えている」と、それは……。

「美月ちゃんもかわいいと思つけどな」

初めて会つた人に胸をときめかせてしまつたこと。

はじめまして。（後書き）

実はこの作品、先日完結した『例え、君が幽霊でも』の元小説となつております。

順番逆だろ！ と突っ込まれた方、ごめんなともです。

これからもぜひ時間が空いていたら、この子たちの物語を読んであげてください。

貴方にとってこの物語が楽しいものでありますように。

以上、美織でした

第1夜（前書き）

奇跡の再会はお約束ですよね。

第1夜

初めて陽平君に出会った次の日、私は3回目の入学式を迎えた。小学校、中学校に続く3回目。何度もやつてもこの緊張感は消えない。

新しいことが始まることへの期待と不安。
それらが全部一度にやってくるのが入学式なのだ。

「如月 美月」
「はい」

ぱーっとそんなことを考えていると、今日から担任になるのである教師に名前を呼ばれた。返事をして立ち上がる。

……そういえば陽平君って、何処の学校なんだろう。まさか同じ学校、なんてことはないよね。

一度そう思つと、やっぱり氣になつてしまつのがヒトの性つものだ。自分の後に呼ばれる人の名前に耳をすませた。式中にきょうあふるのはあんまり良くないからね。

「以上、319名」

最後のクラスの呼名を行つていた教師がそう言つて、今年度入学生の名前が呼び終えられた。やっぱり、陽平、なんていう名前の人はいなかつた。

「やっぱり偶然なんてありえないよね」

ちょっとがつかりしながら、これから1年間過ごすことになる新しい教室へと入つて行つた。

「改めて、今日からこのクラスを担当することになった、遠峰大地だ。担当は古典。まだまだぴちぴちの25歳だ。ちなみに彼女は募集中なんで、よろしく。俺からは以上。じゃあ、窓際の一番前の人から自己紹介してくれ」

何なんだ、この人！ 25の大の男が何がぴちぴちだ！！ しかも自分の教え子に彼女募集中、よろしく、って誰にだ！ 親か。母親に言えばいいのか！？

私が盛大に（心中で）突っ込んでいると、いつの間にか私の番が回つてきていた。やば、何にも考えてなかつた。

「えと、如月美月。きさらみつき 南中出身。趣味は月を見る」と。誕生日は10月。以上、よろしくお願ひします」

座つてから激しく後悔。なんて面白みのかけらもない自己紹介。しかも何か余計なことまで行つちゃつたような気がしないでもない……。こんななんじや誰も寄つてきてくれないよ……。

予想通り、休み時間、私のところに寄つてくる人はいなかつた。近くを通つた時に声をかけることはあっても、話しこもうとすることはなかつた。

私はどちらかといえば、自分から話しかけるのは苦手なほうだから

ら、話しかけてもらわないと話せないんだけどな。

そんなこんなで昼休み。

1人お弁当を抱えながら教室をきょろきょろ見回す私^{わたし}がいた。

「お弁当どうしよう……。初日から1人なんて寂しすぎるしなあ」

やはり先ほどの自己紹介がいけなかつたのか、みんな悪気なく私を無視している。初日から1人で食べると、きっと1人が好きだとか思われて、ずっと1人で食べることになるんだろうな。

「どうしよう……」

「…………らわせさん、如月さん！」

「うわ！　あ、は、はい！」

まさか急に私に話しかけてくれる人なんかいないと思つてたから、かなりのオーバーリアクションをしてしまつた。恥ずかしい……。

「えと、大丈夫？　あのね、如月さんのこと呼んでいる人がいるんだけど」

「あ、ありがとう。ごめんね」

驚かせてしまつた子に一言謝つてから私は出入口のほうを見た。

「え、あれ、嘘……」

びっくりする人物がそこにいた。

「ほんにちは、キサラギ ミツキさん。俺のこと覚えてる?」

「覚えてるも何も、昨日会ったばかりではないですか」

「あれ、何故敬語?」

「え、だって、私あまり陽平君のこと知りませんから」

「昨日のは?」

「あれは、……年下だと思つてたから……です」

「…………」

二人の間に流れる微妙な沈黙。

「ところで、もし一緒に昼食べる人がいないなら差、俺たちと一緒にどう?」

「うん!~? 喜んで!~」

変なテンションになつたのは仕方がない。うん。許せ。

「じゃあ、俺の友達待たせてるし、食堂行こうぜ」

「え、あ、はい」

「それと、敬語とか別にいいから。俺も美用つて呼ぶし、俺のことも陽平とか、陽ちゃんとか、適当に呼んでよ」

「はい、分かりまし……分かつた。じゃあ、陽ちゃん、って呼びま……呼ぶね」

私の敬語と常体が混じつた変な言葉遣いに陽ちゃんは苦笑しながら、手を差し出した。

「これからもよろしくな。じゃ、行こつか

「うん!~

やっぱり陽平君がいい人でした。

第1夜（後書き）

元は自分で好きなように書いていたので、切れ目がバラバラです。
短いのもあれば長いのもある……。

いつものこと書きなおしつか。……でもめんどい。

第2夜（前書き）

課題が終わりません（泣
でもストックしておいて良かつたです。
おかげですぐにアップできます　早めが大事ですね
……。

第2夜

校舎内を歩くこと、約5分。1年生の教室からは若干遠い場所にあるのが、この美華^{みかづき}突高校食堂だ。

陽ちゃんと一緒に入ると、入口から一番遠い（といつてもそこまで広くないので、すぐに見つかる）席に座っている男女3人が声をかけてきた。

「おーい、陽平！　こっちだ！」

「そんなに大声出さなくとも聞こえるつづりの」

そんなことを言いながら、陽ちゃんはその声がしたテーブルのほうへと近づいて行つた。

「遅ーよ。それよりも、その子？ 昨日会つたつていつのは」

「そう。如月美月さん」

「はじめまして。如月美月です」

「かわいいー！ 僕、中山大知^{なかやまだいち}つていうんだ。ついでに2組！ よろしく！」

「おう！ こいつが僕らの中で1番のバカだ」

「何だと… でも言い返せないのが悔しいぜ…」

なんか楽しそうな人たちだな。

私はちょっとほつとした。この人たちなら、3年間楽しく過ごせそう。

「はじめまして、美月さん。あたしは遠峰ゆかり。あたしもだいちやんと一緒に2組よ。いやあ、あたし男の子の中で女の子一人だから居心地悪かったのよねえ。これからよろしくね」

「え、女の子1人つて……。あの人は？」

私はそう言つて、テーブルの端のほうに1人黙つて座り、紙パックの牛乳を飲んでいる人を指差した。ちらりと見た感じでは、女子に見えたけど……。

「……ん、何？ 僕の顔になんかついてる？」
「じゃなくて、自己紹介でしょ、自己紹介！」

思いつきりゆかりちゃんに頭をはたかれたその人は、ちらりと私を見た後、いかにも面倒臭そうに自己紹介した。

「横山凜太郎。2組。帰宅部予定」

「あ、はあ。如月美月です。こちらこそよろしく……」

「凜ちゃん、あんた自己紹介短いわ。そんなんだから友達少ないのよ」

「別に、気にしない」

強いな、この人。私だつたら無理だな、友達がいないなんて。なんて変なところで感心しながらぼーっと新しくできた友人たちを眺める。

「いい加減にしなよ」

「へ？ 私？」

「違う。あなたの後ろの2人。他の人の迷惑になつてる。……まったく、いつも後始末をするのは僕なんだから」

ため息をつきながらも、慣れた様子で手早く喧嘩になつてきた2人を回収する凜太郎君。

何だかんだ言つて、凜太郎君にとつて2人は大切な友達なんだろ

うな、とにかくこれがその団づきから分かつた。

「みんな仲良しなんですね」

「うん。あしたちみんな同じ中学校から上がってきたからね。まあ、腐れ縁つてやつ?」

「「「お前が言つかー」「」「」

3人からの見事な突っ込みが入って、私は思わず笑ってしまった。
本当に楽しそうだな、この人たち。これからが楽しみだ。

「それよりもー、早く飯食おうぜ、飯!」

「つて、あんたは早弁してもう無いでしううが!」

「ねえ、ゆかり様? 僕に弁当を恵んでくれないかなー、なんて」

「つたく、あんたは。入学式早々早弁するか?」

「だつて、高校生の早弁、憧れてたんだー」

「憧れてた、つてあんた……。」の大馬鹿者ー」

「あー、出た。北中名物、遠峰中山の夫婦漫才」

「め、名物?」

「そう。北中出身ならだれでも知ってるぜ。こここれらの漫才みたいな会話。これを文化祭で披露したんだから、そりゃもうすげーのなんの」

「へえ、仲がいいんだね」

「良くないわよー」

「えー、そんなあ。ねえ、お願ひだから、分けて?」

今度は可愛らしくお願いする」としたようだ。

正直男子がやるとキモい。凜太郎君がやるなら問題ないんだろうけど。

「気持ち悪いわ！」

案の定ゆかりちゃんの強烈なビンタがとんできた。痛そう……。

「だいたい、ここは食堂なんだから、昼くらい買えればいいでしょ？」

「今日財布忘れた。……恵んで？」

「……この、大馬鹿者！」

本日一度目のビンタ。ホントに痛そう。左の頬が赤く腫れあがっている。

それにしても、懲りないなあ、この大知つていう人。もしかしてこれが楽しくてやつてるのか？

1人そんなことを考えていると、いつの間にか陽ちゃんが私の隣に来ていた。

「おい、美月。お前も早く食べないと、昼休み終わっちゃうぞ。昼飯食い逃しても知らねーからな」

「え、嘘、もうそんな時間？ やば、急がなきや」

私は慌てて椅子に座りなおしてお弁当を広げる。その隣に陽ちゃんも座つて菓子パンを頬張つている。あんなので足りるのかな？ そんな私の視線に気がついたのか、陽ちゃんが説明した。

「これ、『ザーグ』」

……いつの間に食べ終わつてたんだ、この人。

「つたぐ、しょうがないわね」

結局ゆかりちゃんが大知君にお金を貸すことで話がまとまつたようだ。

「明日の暁だいちゃんのおப்புつね。……倍返しで」

ゆかりちゃんって、優しいのかひどいのか……。

「……食い足りねー。なあ、ゆかり。俺にも何か恵……」

陽ちゃんが急に言葉を切った。急に顔色が悪くなつて、せめて汗まで滲みだしている。

「いや、何でもない。何でもないです!」

田が匂つと、ゆかりちゃんはこいつ首をかしげた。ゆかりちゃんも陽ちゃんの顔色が急に変わったことが不思議なのかな?

再び陽ちゃんに視線を戻すと、今にも土下座しそうな陽ちゃんがいた。変なの。

「そ、もうすぐ昼休みも終わるし、教室に戻ろつか。次は校舎見学だつて。もしかしたら一緒になるかもよ」

ゆかりちゃんの言葉で私たちはそれぞれの教室に戻ることにした。

第2夜（後書き）

話の切れが悪くて、いつもよりもちょっと長めです。でも他の人の作品を読んでいると、もつと長めでもいいような気がするんですけど、どうですかね？ 1話につき3000～5000字くらいで。

第3夜（前書き）

ストックここでつきましたorz
受験中だったから仕方ないよね……。

第3夜

「じゃあ俺、1組だから」

そう言って一番最初に抜けたのは陽ちゃん。軽く手を振つて教室に入つて行く。

「じゃあ、あたしたちもこれで。またあとでね」

そう言つてゆかりちゃん、大知君、凜太郎君の3人が抜けていく。私はちょっとウキウキしながら3組の教室に戻つた。とたんに感じる鋭い視線。ウキウキしていた気持ちが一気に消し飛ぶ。

その視線をたどると、1人の女の子と目があつた。知り合いではない、はずなんだけれど……。

何か気に障ることでもしちゃつたのかな。

とりあえず話しかけてみることにした。

「えと、遠藤遙さんだよね。私に何か用かな
「別に。何もないわ」

自己紹介のときに聞いた名前を必死に思い出して話しかけてみたけど、返事はとても素氣ないものだった。
これは本格的にやばいや。私、何しちゃつたんだろう。

「私、如月美月っていうの。よろしくね」

「…………」

空気が怖い。ひとまず愛想笑いを浮かべながら退散した。

自分の席に着いたところで担任の遠峰先生が教室に入ってきた。

「俺の前に立つの忘れてたけど、これから校舎の見学すっから、全員迷子にならなよ。迷子になつたら……知りん。自分で何とかしろ」

……なんていい加減な。

ん、待てよ。遠峰先生って、ゆかりちゃんと苗字が一緒だし、田元もなんか似てるような……。

「國語」

1人でさつさと教室を出ていく遠峰先生。よく教師になれたな。苗字のことは後でゆかりちゃんに聞いてみると、ひとまず遠峰先生の後についていくことに集中した。

「あ、美月ちゃん」

1人で廊下をうろうろしていると、ちょうどビュカリちゃんたち、2組メンバーに会った。

「どうしたの？ 迷子？」

卷之二

「この学校、無駄に造りが複雑だからね」

絶対に迷子になるまいと頑張つてみんなについてていったのだが、気がつくと周りに誰もいない。

どうやら迷子になつたらしい、といつといひでわざりむかりちやんたちに会えた。

「んじゃ、あたしたちも行こうか。」ひちだよ

「ゆかりちゃん、分かるの？」

「うん。小学生のころからここに入り浸つてたから」

「え、何で？」

「こいつの兄貴、こここの先生なんだよ。大地先生って言つて、すっげえカッコいいんだぜ！」

「確か、如月さんのクラスの担任じやない？」

さつきまでずっと黙つていた凜太郎君が急に口を挟んできた。何だ、普段も喋るんだ。

「凜ちゃん、何で知つてるの？　といつか、大兄つて美月ちゃんのクラスの担任だつたんだ」

「じゃあ、やつぱり遠峰先生つてゆかりちゃんのお兄さんだつたんだ」

「まあね。ごめんね、大兄つて適當だから大変でしょ。現に美月ちゃん迷子になつてるし」

私は曖昧に笑つて「まかすこと」にした。身内の人に悪口なんて言えるわけがない。

「お、何だ。お前らもう一緒にいたのか」

「おお、陽平じゃないか。お前も迷子？」

「んな訳ねーだろ。俺たちのクラスは自由行動なんだよ。つたく、

入ったばかりなのに自由行動つて、迷子にさせる気満々だろ。まつたく

「んじゃ、全員揃つたところで行きましょっか」

というわけで、私たちは5人全員で校舎を見学することにした。それにしてもこの学校の先生つて、みんなの適当なの？ いいのかな、これで。

「大兄、美月ちゃん連れてきたよ」

「あ、ゆかり。お前ら友達だったのか。」¹苦労さん。それから学校では遠峰先生と呼ぶ」と

「生徒を迷子にさせる教師のくせに何言つてんの。……じゃあ美月ちゃん、またね！」

「うん、ありがとう」

ゆかりちゃんは、最後に遠峰先生に向つて悪戯つ子のように笑いかけると、男の子3人を引き連れて立ち去つて行つた。
……ゆかりちゃんには絶対に敵わなそう。

「すまなかつたな、如月。ゆかりは……、まあ、いい奴だと思つからよろしくな」

「遠峰先生つて、妹思いなんですね。私、一人っ子なので羨ましいです」

「そりやか？ そりでもないと思つけど……」

そう言つと、遠峰先生は恥ずかしそうに下を向いた。先生の新しい一面、発見か？

「おーい、全員いるか？ だれか確認しin。んでもって、俺に報告しin。」

前言撤回。遠峰先生は遠峰先生でした。

「こんな大男が恥ずかしがるなんて、ありえない。わつきのはたぶん、私の見間違いだ。」

「よし、たぶん全員居るな。それとさう思に出したんだが、来週の月曜、新入生歓迎テストだから」

「えー！？」

たちまち上がる不満の声。特に多いのが、

「そんな歓迎いらねー！！！」

という男子の声。

「じゃあ、やめるか？ あんなに苦労して入ったのにな。残念だけど、本人の意思なら仕方ないよな……」

「『やらせていただきますーーー』」

初めてこのクラスがまとまつた瞬間だった。やればできるじゅん、このクラス。

「範囲は入試のときと同じく中学までで留mつといひ全てだ。じゃ、帰る準備できた奴から帰つていいぞ」

なんて適当な！ でも早く帰れるなら文句言こません。
私はそそぐと帰る準備をすると、教室を出た。

「おー、やつと終わったか。早く帰ろうぜ。てか、美月ってどこに住んでんの？」

「やつと終わつたか、って何でも終わつてんの？ 私のクラスも早いほうだと思ったのに」

「まあ、あしたちのクラスも、というよりもこの学校の先生たちつて良くも悪くも適當な人たちばつかだからね。大兄見てれば分かるでしょ」

「まあ、ね」

「とりあえず帰ろうぜ。俺、腹減つたから何か食つてから帰りたい」

大知君がお腹を押さえながら言つた。

「お前、財布忘れてただろ」

「凜におじつてもらい」

「……3倍返し」

「凜……、ヒドイつ」

悪いのは大知君です。ホントに懲りないな、この人。

「ま、でもどつかに寄つてくのも悪くないかもね。どうせ行くなら僕、駅のそばがいい」

「そうね、駅のそばだつたら何かと便利だし」

というわけで、私たちは学校を出て駅のほうへと向かつた。

第3夜（後書き）

次回から、もしかしたら話の雰囲気とか少し変わるかもしれません。
ご了承ください。

第4夜（前書き）

あまあまです。
初々しいです。
見えてると若干いろいろいらします。
そんなものでよろしい方のみ、先にお進みください（笑
私にこんなモノもかけたんだなあ……

第4夜

「「「うま～」」

口の中でとろける甘ーいアイス。これにときめかない女子高生がないわけがない！

そんなこんなで駅前のアイ스크リー・ムショップにやつてきた私たち5人は、甘いものが苦手だという陽ちゃん以外は全員手にカップに入ったアイスクリー・ムを持っていた。

「しつかしよ、女子つてよくこんなんで腹もつな。俺、1口じゃたんねー」

「つか、女子はもとよりお前もよくそんな甘いもん食えるな

1人甘いものが食べられない陽ちゃんはアイスコーヒーを片手に呆れ顔だ。

「だつて俺、食いもんだつたら基本何でも平氣だもん」「お前なあ……」

陽ちゃんは大知君に関してはもう何か諦めたらしく、凜太郎君のほうへと顔を向けた。

「凜、お前は甘いもん平氣なのか？」

「僕、こつ見えても甘党だよ？」このメニューは全部制覇した

「「「ウソつー！」」

ゆかりちゃん以外の全員の声がそろつた。ゆかりちゃんは顔色一つ変えず幸せそうにアイスを頬張っている。

「ゆかりちゃんは知つてたの？」

「知つてるも何も、アイス全制覇に付き合つたのはあたしよ。たぶん凜ちゃんはあたし以上に甘いモノ好きよ」

意外だなあ。凜太郎君つて、結構クールなイメージだから勝手に甘いものは苦手だと思つてた。

「何、僕が甘いもの好きじゃいけない？」

「いや、そういうわけじゃないけど……、意外だなーって。凜君の意外な一面発見、みたいな」

とたんに怪訝な顔になる凜太郎君。私、何かまずいこと言つたかな。

私が1人あわあわしていると、凜太郎君がまた口を開いた。

「凜君つて……」

「あ、ごめなさい。嫌だつた？ みんな凜とか、凜ちゃんつて呼んでるから、私もいいかなつて思つて……。嫌だつたら止めます」「別に嫌じやないけど。急だつたからびっくりしただけ」「じゃあ、凜君つて呼ばせてもらうね」

私は嬉しくなつて思わず顔がにやけた。それに気がついた大知君がすかさず割り込んでくる。

「あー、凜だけずるい！ ねえ、美月ちゃん、俺のことは大ちゃんつて呼んでよ」

「うん。分かつた。大ちゃん、だね」

「じゃ、俺もー」

「つて、陽ちゃんはもう陽ちゃんつて呼んでるでしょ」

あ、そつか。といつて頭を搔いた陽ちゃんに全員が笑った。特に大ちゃんとゆかりちゃんは遠慮なしに爆笑している。

「美月」

「え？」

「君が僕のこと凜君って呼ぶなら、僕も美月って呼ぶ。いい？」

「もちろん！」

今日一日で何だかみんなとすっごく仲良くなれたような気がする。私は人と話すのが苦手だから、こんなに人と会話で笑つたりしたのは初めてかもしれない。

それもみんな、この優しくて楽しい4人のおかげだよね。

私は久々の楽しい会話を楽しんだ。

でも、放課後って短いもので、あつという間に外が暗くなつてきた。

「うわ、もうこんな時間。そろそろ帰らないとまずいわね」

「ま、俺たち男組は別にいいけど、女の子はな。美月、家どー? 送つてくれよ」

「え、そんな。いいよ。家、そんなに遠くないし」

「ん~、でも、女の子が1人は心配だから、ね」

陽ちゃんの申し出に少々腰が引けながらも、お願いすることになった。

「じゃ、あたしのことは大ちゃんと凜ちゃんが送つてね
「げ、俺はゆかりかよ」

「…………」

「大ちゃん、げって何よ、げって。それに凜ちゃん、何故黙る?」

帰る時も賑やかな3人を見送つて、私と陽ちゃんも歩き出す。

「じゃ、俺たちも行こつか」

そう言つて駅の方へと歩き出す陽ちゃん。

私が通う美華突高校は、東西南北にある中学校のちょうど北よりもある。

最寄り駅もどちらかと言えば北よりもあるから、私は通学には電車を使つていた。

「あれ、陽ちゃんも電車通? 北中出身じゃなかつたつけ?」

「俺、中学卒業した時に南中よりのところに引っ越したんだよ」「へえ。どうらへん?」

陽平君が答えた住所は意外と私の家から近かつた。

「家、すぐ近くじゃん。もしかしたら朝とか会うかもね」

「俺、朝迎えに行くよ。美月一人だと寝坊とかしてそう」

「な! そんなことないもん! 私、遅刻したことないもん」

「ホントか?」

陽ちゃんがニヤニヤしながら言つた。からかってるんだな。むう。

そんなこんなしていふうちに駅に着き、ちょうど来た電車に2人一緒に乗り込んだ。

寄り道したので帰る時間が中途半端だったのか、席は結構開いていた。私たちはドアのすぐ近くの席に並んで座つた。

「そういえば、すうぐ今さらなんだけど、俺美月にひやんと自己紹介してなかつたよな」

「あ、そういえばそうかも。最初会つた時も結局あだ名とかしか言ってなかつたし」

「悪い悪い。んと、じゃあ改めまして。俺の名前は井上陽平。いのうえ ようへい 8月生まれでO型。好きなモノはバスケかな」

「私は如月美月。10月生まれのAB型。好きなことは円を見る」と。これからもよろしくね、陽ちゃん」

改めて自己紹介して何だか照れくさくなつた。そのまま田を合わせることができなくなつたので顔を俯かせる。

下を向いているといろいろ考えてしまうのがヒトの性といつもので、そういえば私、こんなに至近距離で男の子と喋つたのは、初めてかも……。

なんてことを考えてくるつたり、だんだんと顔が熱くなつてきた。やばい、これは顔も赤くなつてるかもしれない。

私の顔、見られちゃつたかな、と思つて陽ちゃんの様子をちらりとうががうと、陽ちゃんも視線をそらしていた。その頬が少しだけ赤くなつていたように見えたのは気のせいだろうか。

「まあ、その、何だ。これからよろしくな、美月」

「う、いらっしゃい」

そんな若い2人の初々しい挨拶を、たまたま同じ電車に乗り合わせた乗客たちが微笑ましげに見ていたことに最後まで本人たちが気づくことはなかつた。

第4夜（後書き）

感想、アドバイス、またはリクエストなどがありましたらお気軽に
どうぞ
間違いの指摘などもありましたらその度にちょくちょく直していく
のでよろしくお願ひします。

次回は夜のお話です。またまた月が綺麗です。

第5夜（前書き）

甘い、甘いです。ここ大事です。2回言いました。
今回はホントに甘いです。書いてる作者本人が悶えるほどです。
なら書くな？ そんなの聞こえません。

第5夜

「あれ、美月んちってこいなの?
「うそ。そうだけど」

陽ちゃんが驚いた顔をして言った。次に、3軒先の角にある家を指差すと、

「俺んち、あわー」

「ウソー!？」

めちゃくちやん近所でした

「そつか~、こんなに近いのかあ。じゃ、俺、明日から毎朝美月のこと迎えに行くよ」

「え、そんなのいいよ。私朝遅いよ?」

「俺が早く行つて起こしてやる。んじや、明日7時半にな

「え、ちょっと待つて、私無理だつてばー。」

私の叫びには軽く手を振つただけで答えて、陽ちゃんは自分の家に入つて行つた。

ちなみに私が朝遅いのは本当で、今日も遅刻ギリギリの電車に乗つていた。その電車すら捕まるか怪しかつたんだけどね。

「そんな、朝7時半、つて私何時に起きればいいのよ……」

そんな私が普段起きているのは7時。確実に間に合わない。女子は支度に時間がかかるものです。なら早く起きろって? 無理だから困つてる。

「お母さんに頼んでみよう……」

お母さんに事情を話すのはちょっと気が引けるけど、この際慣れ
るまではお母さんに頼むしか他にあるまい。お母さんはたぶん理由
聞いたら大はしゃぎして茶化すんだろうな……。

今から考えるだけで気が滅入る。

あ、でも起きたとしても、朝陽ちゃんが来た時点で早起きする
理由がバレるのか。どっちにしろ母、大はしゃぎ決定。

「もういいや。諦めよ！」

こくら4円とはいえ、口が落ちるとだいぶ冷えてくる。風邪をひ
く前に家の中に入ることにした。

「ハアア。やつぱり茶化された……」

その日の夜、私はまた町はずれのビルの屋上に来ていた。
膝を抱えて三角座り。拗ねるポーズの完成。

案の定、母親に明日早く起こしてほしことにその理由を伝える
と、

「さやー、何、美月にもうひとつ春到来！？　お母さん嬉しいわあ
！」

ヒーヒのトーンショーンである。若々しこのせこいんだけど、もう少

し大人になつてほしい。

「ハアア、ともう何度田になるのか分からぬため息をついていると、背後のドアからギイツとドアが開く音がした。

「やつぱりここにいたか。女の子が夜に一人で歩くのは危ない、つて言つただろう」

昨日と同じくには陽ちゃんがいた。

「つー、じつしたんだよ。拗ねてんのか?」

私のポーズを見て陽ちゃんが聞いてきた。原因は貴方だよーー!とか言えるわけもなく、私はまた一つため息をついた。

「何だよ、俺なんかしたか?」

「したといえ巴した。してないといえ巴してない」

「何だよ、それ」

陽ちゃんが苦笑しながら私に近づくと、隣に腰を下ろした。と同時に、自分が着ていた上着を私に差し出した。

「着てろよ。寒いだろ。女の子が体冷やしちゃいけないもんな」

「いいよ。それじゃあ陽ちゃんが風邪ひいやう」

「だったら今度からははちゃんと着てくること。今はとりあえず着とけ」

と半ば強引に私に上着をかけた。まだ陽ちゃんの体温が残つてて温かかった。

「……ありがと」

「おう。俺は丈夫だからそいつ風邪なんか引かねえよ
「そんなにちっちゃいのに？」

私が悪戯っぽく聞くと、陽ちゃんはにやりと笑つて私にかけた上着に手を伸ばした。

「そんなこと言つなら俺も一緒にに入るぞ」

「え、ちょっと待つて。近い、近いって！」

私が一人あわあわしているのを見て気がすんだのか、陽ちゃんは上着から手をパツと離して笑つた。

陽ちゃんの笑いが収まるごとに、私たちはそのまま一人で並んで月を見上げた。やつぱり昨日が満月だつたらしく、今日の月は少しだけ欠けている。

そんな月をじばりく眺めていると、陽ちゃんが唐突に話しかけてきた。

「そついいえばさ、美月つて毎日ここから月眺めてるのか？」

「うん。もう6年になるかな。私、月を眺めるのが好きなの。観察つてほどじやなくて、ただ単にぼーっと眺めるのが好き。もう日課みたいなもんだよ」

「そつか」

それからは特に会話らしい会話もなく、一人でただぼーっと月を眺めていた。

しばらくして、隣の陽ちゃんが小さく震えているのに気がついた。

「あ、「めぐ、上着借りっぱなしだったから寒いよね。これ返すか

「早く帰れ!」「ひりひり

「いや、寒さは別に平気だけど、そろそろ美冴の親御さんが心配するよな。うそ、帰れ!」

私が差し出した上着を着たとき、陽ちゃんが小さく、温かい、と
呟いて微笑んだのは見なかつたことにした。

「どうした、美冴? 頬真っ赤だね」「別に!?

ちよつと声が裏返つたのは「愛嬌だ。

陽ちゃんが変な奴、と小さく笑いながら私の手を握つた。寒いか
ら、と言い訳して陽ちゃんはそのまま歩き出す。
一歩いと私の心拍数も上がつていった。

第5夜（後書き）

体調不良と課題が重なつて更新遅くなりました。
はい、もう元気です。大丈夫です。こんな甘いもの書いてても平気
です。

なんかもう、いろいろフラグが立つてます。察しのいい方はもう氣
がついてるとは思いますが、美月はああでこうなります。
え、分からぬ？ 作者はネタばれしない主義です。

第6夜

「美月！ おはよー！」

次の日の朝、陽ちゃんは約束通り7時半きつちりに私のことを迎えにきた。昨日私と同じで夜遅かつたはずなのに、何でそんなに余裕があるんだ？ そんな私も今日はきつちりお母さんに早めに起こしてもらつたから余裕。……起こすときにまた軽く茶化されたのは秘密だ。

「おはよ、陽ちゃん。昨日遅かつたのに早いね」

「うーん、俺、朝早いのには慣れてるから。もともと中学ではバスケやつてて、朝練とかあつたし」

「え、陽ちゃんつてバスケやつてたの？」

「……何だよ、そのめっちゃ驚いた顔は。ちっちゃい奴がバスケやつてちや悪いかよ」

「いや、そういう意味じやなくて。……そり、初耳だつたから！ 陽ちゃんのことまだ何にも知らないな、って思つて」

また陽ちゃんのどうせ俺なんて、が始まる前に私はフォローを入れた。フォローになつてるか？ これ。でも効果はあつたらしく、陽ちゃんがそれもそつだな、といつて機嫌が直つた。

「そういやまだ会つて3日目だしな。お互のこと知らなくて当たり前か。俺、知つてると思つけど北中出身で、引退するまでバスケやつてたんだ。美月は？」

「私は美術部だつた。とはいってもいつも月の絵ばつかり書いてたから変な人扱いされてたけどね」「らしいや

「ちょっとひどいことを言つて陽ちゃんはハハハ、と笑つた。私も悪い気はしなかつたので、一緒に笑う。こんな朝も悪くないかもしない。

陽ちゃんと笑いながら歩いていると、あつという間に駅に着く。

駅のホームに入ると電車はすぐには来た。

「す、」。タイミングぴったり

「ぴつたりって……。電車の時間に合わせてきただに決まつてんだろ」「え、そうなの？ 私何も考えずに家出てたから20分待つとか普通だつたなあ」「お前なあ……」

陽ちゃんが何か言いたそうな顔をしていたが、諦めたのかため息をひとつついただけで何も言わなかつた。変なの。

「ほら、陽ちゃん。早く乗らないと電車行っちゃうよ」

私は動かない陽ちゃんを押して電車に乗り込んだ。いつもよりもずっと早い電車は結構空いていて、2人並んで座ることができた。

「す、」。ちょっと頑張つて早く来るだけで「こんなに違つんだ」「す、」いつて、お前いつも何時に来てるんだよ

「うんと、8時くらい？」

「うわ、ギリギリ。もつと早く来いよ」

「だつて、起きられないんだもん。用とか見ると夜遅くなつちやうから」

「それもさうか」

お。陽ちゃんは早く寝るとは言わない人らしい。

私が早く起きられない理由を人に話すと、だいたいの人は月なんか見てないで早く寝るという。陽ちゃんのように何も言わないのは少数派だ。

「お前、月見るのホントに好きだもんな」

ドキッ。心臓が跳ねた。何も言わなかつた人はだいたい呆れて何も言えなかつた人だ。私の好きなことを理解したうえでこう言つてくれる人は初めてだつた。

「どうした？ 頬ちょっと赤いぞ」

「何でもないっ」

ふいつと陽ちゃんから顔を背ける。

「何だよ、急に。変な奴」

そう言つて、顔を見ていないくとも陽ちゃんが小さく笑うのが分かつた。私の心臓はまだドキドキしていた。

「ほら、もう降りるぞ。それとも乗り過ごしたいのか
「降りるもん！」

陽ちゃんがからかつてきているのは分かつてゐるけど、ついついかみつてしまつ。反射でかみつてしまつるのは、陽ちゃんがこのぐらいでは嫌わないと信じられるからか。

つて、私朝から何考えてんだ！？ これじゃまるで……

「おはよー！ 美月ちゃんどしたの？ 頬真つ赤。恋する乙女みた

……

「それ以上言わないで！！」

気がつくと駅を出たところでタイミング良く鉢合せたゆかりちゃんが私の顔を見てニヤニヤ笑っている。それきまで同じことを考えていただけに、恥ずかしさ倍増だ。

「もう、美月ちゃんつたら朝からカワイイ」
「~~~~~ツ」

今日は朝からからかわれまくりだ。私の心臓もドキドキしつぱなしだし、何だかもう疲れた。

「おはよー！ 美月ちゃんに陽平」

「おはよ」

ゆかりちゃんの後ろから大ちゃんと凜君もやつてきた。3人は家も近いらしい。

「いいな、陽平。朝から美月ちゃんと一緒かよ。俺なんか……」「俺なんか、何？ 大ちゃんはあたしじゃ不満？」
「何でもないです！！」

朝からコント状態の2人の会話に、私と陽ちゃんは顔を見合させて笑う。

「ほら、せっかく美月と陽平に会流したんだから早く学校行い！」

やれやれ、といった感じで凜君が間にはいる。大ちゃんはほつとしたように、ゆかりちゃんはちょっと残念そうにいがみ合いをやめ

る。

「中学の時もこんな感じだったの？」

陽ちゃんに「いや」と尋ねる。そしたら陽ちゃんも「いや」と返してきた。

「や。朝こんな感じで言い合って、途中でしづれ切らした凜が仲裁するまで続ける。俺は面白かったからそのままにしてたしな」

中学生のころの翌下校の様子が容易に想像できて、思わずくすりと笑いをこぼす。

「ねえ、美月ちゃん

「ん、何？」

大ちゃんと言ひ合ってたゆかりちゃんが私に近寄ってきて、耳元に口を寄せながら言った。

「美月ちゃんは、陽ちゃんのこと、好き？」

「！？ そんなことないよー！」

急に大声を出した私に不審げな目を向ける男子3人。慌てて声のトーンを落とす。

「なんで、どうして、急に何？」

「だって、美月ちゃんやけに赤い顔してたから。ふふ、楽しみだわ

」

何が楽しみなのか分からぬけど、また真っ赤になってしまった

私を不思議そうに見る男子3人の視線から逃げながら学校へと早足で向かった。

第7夜

「やつと着いた」

学校に着くなり、ゆかりちゃんから逃げるよつて自分の教室に入つてしまつた。

教室内を見回すと、まだ朝早いせいか人はかなり少ない。

「確かに今日は1時間め、国語だつたよね。あ、高校つて現代文と古典に別れるんだ。今日は……古典か。つてことは遠峰先生が最初の授業か」

一人でブツブツ言つてると、教室のドアがガラリと開いて、人が入つてきた。

「あ、遠藤さん」

「……おはようございます。今日は早いんですね」

なんかすんごい嫌味言われたよつな氣がするけど、私ホントに何しちゃつたんだろ。

小心者の私は口の中でもう一歩出ようとせず、とか言いながら視線をそらした。

遠藤さんはそんな私を気にした風もなく、自分の席に着くと昨日もらつたばかりの教科書を広げた。

「うわ、偉！ 予習してるんだ」

「……皮肉ですか？ それともただ私の邪魔をしたいだけですか？」

口調は疑問の態を保っているが、その実かなり怒っているのが分かる。私は慌てて弁解した。

「いえ、私はただ素直にすゞいと思つただけで……。邪魔したなら謝ります。」めんなさい」

素直に謝った私に少し驚いたのか、軽く目を瞠ると少し柔らかくなつた口調で話しかけてきた。

「ただ、高校の授業が不安だっただけです。普段私、予習なんかしてませんよ」

「あ、そつなの？ 実は私も」

そう言つて、小さく笑いあつ。ちょっとだけ遠藤さんに近付けたかな？

これ以上邪魔するのも悪いので、私は自分の席についてぼーっと窓の外を眺める。遠藤さんみたいに教科書でも読んでるのがいいのかもしれないが、私が読んだら確実に寝てしまう。それが分かるぐらいには自分を知つていた。

「んー、暇。ゆかりちゃんのクラスにでも行つてみよつかな」

そう考へついた私の頭からは、すでに先ほどのことなんかきれいそつぱり消えていた。

2組の教室を覗き込むと、すでに陽ちゃんが来ていて、北中4人組で楽しそうに談笑していた。

私が中に入るのをためらつていると、凜君が私に気がついて近寄つてくる。

「どうしたの？ 中に入ってくれば？」

「いや、ちょっと入りにくくなつて」

「ふうん」

そういうと、凜君は私の腕を掴んで半ば無理やり教室の中へと引っ張り込んだ。

「あ、美月ちゃん。やつと来た」

「早く来たからこはお喋り楽しめなきゃね。ま、部活始まるまでだけね」

「部活って、ゆかりちゃんたちはもう入りたい部活決まってんの？」「一応ね。あたしは中学の時もやつてたし、バスケ部に入ろうつかなつて」

「俺もバスケ部。ひっちゃんけどな」

「俺はサッカー部。これでも中学のときからやつてたんだぜ」「昨日も言つたけど、僕は帰宅部。特にやりたいこともないしね」

「へー、みんなけつこう考えてたんだな。私はどうしようかな。何も考えてないや。」

「美月ちゃんは？」

ゆかりちゃんに聞かれたけど、私はすぐに答えることができなかつた。しばらく考えて出した答えがこれ。

「……分かんない。仮入部のとき見てから決めよっかな……なんて「んー、別にそれでもいいんじゃねーの。高校の部活って、中学の時よりも種類増えるもんな」

「あ、そうだ。美月ちゃん、決まってないなら一度バスケ部見にきなよ」

「バスケ部があ。私運動苦手だからな……」

「マネージャーとかもあるし、見るだけなら。ね？」

そこまで言われたら断れるわけもなく、私は首を縦に振った。

「美月ちゃん、サッカー部にもおいでよ！ こんな可愛い子がマネージャーさんだったらチームの志氣も上がるしね！」

大ちゃんが目をキラキラさせながら言つてきた。それだけでも苦笑しながら首を縦に振つて了承の意を伝える。それで嬉しそうな大ちゃんを見ていると、何だかこちらまで嬉しくなつてくる。

「でも、まだ入るとか決めてないからね？」

「これだけは念を押しておく。

「分かつてるって！ ああ、俺美月ちゃん來たら張り切っちゃうかも！」

「つたぐ、相変わらず大知は単純な奴だな」

「あたしも行つてあげよつか？」

「！」遠慮します！！」

この一言でまた言い争いになった。凜君は横でため息をついているけど、言い合つ2人は何だかんだで楽しそうだった。

「じゃ、俺たちそろそろ教室戻るわ。予鈴なつたしな。行こうぜ、

美月」

「え、嘘、もうそんな時間？」

陽ちゃんが教室を出るときに、じゃ、とこつて手を振ると、まだ

言い争つている2人にため息をつきながらも凜君が手を振り返してくれた。

教室を出ると、1組の陽ちゃんは右に、3組の私は左に行く。別れる直前に陽ちゃんが、

「また昼にな。寝るなよ」

「分かってるって!」

からかつてくるから、また顔が赤くなってしまった。教室のドアに手をかけて、軽く息を整えてから中へと入る。

時計を見ると、始業まではまだ少しだけ時間があった。

「まだ時間あるし、教科書でも読んでいようかな」

読むこと数秒……

「……(ノヽヽ)」

そのまま数分後。

「おーし、じゃあ一時間め始めるべー。誰か如月起こしてやれー」

初めての授業からやらかしてしまった私であった。

第8夜（前書き）

吐く！ 砂糖吐く！！

作者本人が言つてているのだから間違いありません。

もう一個別に書いているほうが若干シリアルス気味なのでその分こち
らで発散です。

やつぱり書くならベタ甘恋愛だよね

第8夜

その日の放課後、私は昨日と同じメンバーと並んで帰り道を歩きながら、今日の出来事について愚痴つていた。

「それでね、あの後予習しようと思つて教科書眺めてたら寝ちゃつて……結局大地先生が入つてくるまで気がつかなくて起しきされた……」

「お前教科書読んで寝るタイプか！ ハマリすぎてて笑えるー。」

「ちょっと、陽ちゃんに大ちゃん、笑いすぎー。」

私が噛みついでいるのは陽ちゃんと大ちゃんの2人だけだが、ゆかりちゃんと凜君も遠慮容赦なくクスクスと笑つている。まあ、私もそれ狙つてたから気にしないけどね。むしろ一緒に笑つてる。

「もしかして、美月ちゃんは勉強苦手な人？」

「うう、その通りです。ここに入れたのもびっくりするくらい……」

「何だ、じゃあ俺と一緒にだな！」

「いや、いくらなんでもお前と一緒にしたら美月が可哀想だ」

大ちゃんの言葉に陽ちゃんが遠慮容赦なく突っ込む。その横では凜君がやれやれ、とでも言つようにため息をついている。大ちゃんの成績つてそんなに悪いんだろうか？

「うわあ、そんなこと言わると来週のテスト心配になつてきた……」

「私もだあ。入試のときと一緒に言われてもそんなのもう頭から抜けちやつてるよ……」

大ちゃんと2人仲良く頭を抱える。今日はもつ金曜日だから、テストまで実質あと3日だ。

「ちょ、そんなに？ 大ちゃんはともかく美月ちゃんまでそんな子だとは思ってなかつたわ」

「いいなあ、ゆかりちゃんは余裕そうで。凜君は……言わなくともよさそう」

「ちょ、ちょっと待て。なぜそこに俺が入つてない？」

「え、だつて陽ちゃんはこの2人に比べてあんまり……」

だつて、陽ちゃんつて結構バスケバカだつたみたいだし、この性格と勉強つてあんまり結びつかない。せいぜい私と同じくらいかと……。

「あら、美月ちゃん。じつ見えても陽ちゃんは北中で結構成績良かつたのよ。Jのメンバーでは凜ちゃんとあたしの次くらいに。学年で言うと……30番くらい？」

「ゆかり～、そこまでバラをなくも……。恥ずかしいだろ」

陽ちゃんが照れてる……、つて、突つ込むといふはそこじやなくて！ 陽ちゃんつて運動もできるのに勉強もできるんだ！ 私とは大違ひだなあ……。

「ねえ、勉強つてどうやつたらできるようになるのかな？」

「あ、それ、俺も聞いたかった。万年最下位争いの俺にも教えてくれよ」

あ～、やっぱり大ちゃんつて最下位争つてたんだ。よくそれでうちの高校入れたね？ 逆に尊敬です。

「そうね……よし。みんな土曜日空いてる？　あたしんちで勉強会開くわよ！　美月ちゃんももし暇だったらおいで。専属教師が見ててくれるから」

そう言つて少しだけ意地悪そうにゆかりちゃんが笑つた。専属教師つて、大地先生のことかな？　ゆかりちゃんのその顔でなんとなく察せられた。

「お、大地先生が見てくれんの！？　よつしや、絶対行く！」
「久々に大地さんが見てくれるのか。じゃ、僕も行こうかな」

「ん？　大地先生つて何気に入気？　勉強がとてもよくできそうな凜君までもが楽しみにすると言つのだから相当なものだろう。」

「俺、大地さんのおかげでこの高校入れたようなもんだしな……」「そうねえ、あんたが大兄に一番迷惑かけてたもんねえ」

ゆかりちゃんのその一言でまたもや喧嘩勃発。しかし私にはもうそれがただのじやれあいにしか見えないのでさらりと無視する。
そんな私に凜君がこそっと教えてくれた。

「僕たち、受験勉強するときにみんな大地さんに教わってたんだよ。大地さん、教えるの上手だし。一番危なかつた大知だから、大地さんもつきつきりで勉強見てたな」

「あはは、っぽいね」

「そういうや凜も自分の勉強あるのに大知の勉強見てやつてたよな」「まあね。僕もみんなで同じ高校に行きたかったし」

お、何気に凜君の仲間思いなところ、発見か？　しつかし、あの一番ピリピリする受験で他人の勉強まで見る余裕のある凜君……恐

るべし。私は絶対に見てもうつ側だな。

「つたぐ、勉強会するんでしょ。美月も困つてんだから早く予定決めちゃわないと」

凜君の仲裁でやつとゆかりちゃんと大ちゃんの言い争い（じゃれあい）が終わつた。ホントに仲いいな、この2人は。ここまでくると逆に羨ましい。

「それもそうね。じゃあ、確か陽ちゃんは美月ちゃんと家近いのよね？　陽ちゃんはあたしんち知つてるはずだから美月ちゃん連れてきて。時間は午後2時から！　時間厳守よ！」

そう言つて、いつの間にか駅の前まで来ていたので、そのまま凜君と大ちゃんを引きつれて立ち去つていくゆかりちゃん。もう、ホントに男らしい人です。

ゆかりちゃんの後ろ姿を見送つた後、陽ちゃんと私は顔を見合わせて笑つた。

「というわけで、時間厳守らしさので、1時半に迎えに行くよ」

「え、迎えに来てもうつなんていいよ。大変でしょ？」

「どじが大変なんだよ。家すぐ近くなのに。駅に向かつ途中みたいなものだし、気にする」とねーよ」

「そう？　じゃ、お言葉に甘えて……」

「うわあ、なんか恋人同士みたいな会話だなあ……。なんてことを考えていたら、ホントに恥ずかしくなつてきた。内容的にはただ勉強会に行くだけなのに！」

「ん、どうした、美月。顔赤いぞ。熱あるなら明日行くのやめとく

か？」

「あ、いや、別に熱とか無いから気にしないで！　じゃ、また明日
！」

「また明日つて、同じ電車だらうが」

「うわあ、私のバカ！　何でこのくらいでテンパってるのよー。

それから少し気まずい雰囲気（陽ちゃんは何故か機嫌よさそうだ
ったけど）のまま電車に揺られて帰る放課後でした。ホント、今日
一日ついてない。

第9夜

「ふわああ……。今何時……？」

次の日、つまり土曜日。私は眠い目をこすりながら枕元にいつも置いている役立たずの（自分で無意識に止めてるだけ）目覚まし時計に手を伸ばす。カーテンの隙間から差し込む日の光が殺人的な力を持つて私に襲いかかるようだ。

「今日は陽ちゃんが迎えに来るから早く起きな……1時……？　だと？」

瞬間はっきりと意識が覚醒する。

ちよつと待て。今日の約束は何時だった？　もちろん1時半。変わらはずなんてあるはずがない。今の時刻は？　……1時1分。

「こんなところで一分も時間の無駄遣いをしてる暇があるか！－！」

そこからの私はすさまじかった。誰か褒めてくれ、私を。

5秒で階段を駆け下り、10秒で髪を整える。さらに置いてあつた昼食（というのが朝食）を15秒で平らげ、20秒で洗顔と歯磨きをすませる。ここまでで50秒、約1分だ。

続けて30秒で自室に戻って持ち物の確認をし、クローゼットを開けたところで私の時間は止まった。

シマツタ、ナーラキテイコウ。

そもそも友達のうちにに行くのだから、家にいるときよつもひつ

とおめかしすればいいだけである。

ところがどっこい、今回は担任の家もあるのだ。休日に先生に会つとか、何着てけばいいのよ！？ まさか制服着ていくわけにもいかないし、あんまり派手な服も着ていけない。このさじ加減が微妙である。

結局クローゼットの前で25分間唸つた結果、淡い色のシャツに濃いめのカーディガンを重ね、ひざ丈のスカートという何とも無難で地味な格好に落ちついた。

姿見の前で一通り自分の姿を確認し、OKサインを出したところで玄関のチャイムが鳴つた。時計を見ると1時半ぴったり。ギリギリ間に合つた。

準備しておいた鞄を掴むと、私は階段を駆け降りた。

「行つてきます！」

一言だけ中のほうに声をかけて、私は外に飛び出した。

「よー、今日は寝坊しなかったか？」
「し、してないもん！」

早くも図星をあてられ、動搖する私。そんな私を見て陽ちゃんはクスクスと笑つている。

「まあ、いいや。じゃあ、行こつか」

陽ちゃんが駅のほうへと歩き始めたので私もその隣に並ぶ。隣を歩いていると、ふと疑問が浮かんだので、私は訪ねてみるとし

た。

「ねえ、陽ちゃんの得意教科って何？」

「んー、基本的に理系教科なら得意だけど、物理が一番かな。美月は？」

「私？ 私は……国語……かな？」

「何だ、その自信なさげな感じ！」

けだけたと笑う陽ちゃんの声が住宅街に響く。一通り笑って気がすんだのか、陽ちゃんが私を振りかえった。もちろん私の機嫌はナメである。

「あー、悪い。悪かったって。だから機嫌直せよ。な？」

な？ つて、機嫌損なわせたのはあなたでしょ！ とはへタレの私は面と向かって言えるわけもなく、仕方がないので許すことにしてた。

駅について、またもやタイミング良くホームに滑り込んできた電車に乗り、いつも登校のとき降りる駅で電車を降りた。たぶん時間とか調べてきてたんだろうな。さすがです。

「ゆかりんちは駅から歩いて15分くらいのところだから

そう言つて歩道を歩き始める陽ちゃん。私が隣に並ぶとさりげなく車道側を歩いてくれた。結構紳士的なんだな。こう見えても、気づけば歩幅も合わせてくれているようで、何とも歩きやすい。

しばらく歩いて陽ちゃんは一軒の家の前で立ち止まつた。

「ゆかりちゃんちって、ここ？」

「ん。で、あっちが凜ちで、そこのが大知んち」

そう言つてゆかりちゃんちの斜め右前にある家と左隣の家を指差した。みんな近つ！

「んじゃ、行くぞ」

そう言つて陽ちゃんがインター ホンに手を伸ばした。

「……ありがと」

小ちくやう言つたら、陽ちゃんは一瞬だけ動作をとめた……ひとつ気がしたけど氣のせいかな？

ま、でも感謝をこめて、ね。一応。帰りにもう一回言つてみようかな。

第10夜

インター ホンを鳴らすと、ゆかりちゃんはすぐドアを開けた。

「いらっしゃい！ 美月ちゃんたちで最後よ。早く上がって上がつて！」

「お邪魔します」

私と陽ちゃんは礼儀正しく頭を下げてから玄関に上がる。ゆかりちゃんの後について2階に上がり、右側の1番手前の部屋に入る。中にはすでに凜君と大ちゃんがすでに勉強を始めていて、丸めたノートで大ちゃんが凜君に頭をはたかれているところだった。

「痛ッ！ つたぐ、凜は勉強のことになると容赦ないよな……」

「それはお前が出来なさすぎるからだ。大知以外なら僕ももうちょっと紳士的に教える。そもそもお前はこれくらいしないと勉強しないだろ？」

「うう……その通りです」

へえ、意外。凜君もこんな風にじやれあうこともあるんだ。いつもクールな凜君が子供みたいに言ひ合つてるのはかなりレアかもしれない。

じつと見つめる私の視線に気がついたのか、凜君が顔を上げた。目が合うと、凜君はすくっと立ち上がり、私のそばまで来た。

「今日の僕、なんか変？」

「あ、いや、ちょっと珍しいな、と思って。凜君はいつも仲裁とか抑え役だからじゃれあつてるとこ見たこと無かつたし」

「ふーん。ま、僕も今日はoffモードだからね。僕つて結構子供っぽいよ。がつかりした?」

「全然。逆に新しい一面発見して嬉しいかも」

私の言葉に凜君は苦笑してそのまま離れていった。

「じゃ、全員揃つたことだし、先生呼んでくるから。それまでちょっと待つて」

ゆかりちゃんの言葉にそれぞれ持つてきたワークやらノートやらを出して広げた。私も数学と英語のノートを広げる。書いてあるのは超基本的なことなので若干恥ずかしいが、頭の出来の悪さはすでにカミングアウト済みなので今更だろう。

大ちゃんが凜君に頭をはたかれつつ勉強しているのを眺めながら待っていると、ほどなくしてゆかりちゃんが大地先生を連れて部屋に戻ってきた。

「あ、如月も来てるのか。教え子が増えたな」

「すみません。お世話になります」

「いや、教えること自体は好きだから全然構わないぞ。むしろもつと連れてこい」

休日だからか大地先生の雰囲気もいつもとちょっと違う。これがあの初日から担当の生徒をほつたらかしにした人物と同じなのか!?

「ホント、大兄といい、凜ちゃんといい、勉強のできる人はoffとoffの差が激しいのかしら」

私の心の声を映したかのように、ゆかりちゃんがぼそりと呟いた。

私も心の中で激しく同意する。

「んじゃ、早速始めるとするか。凜、お前先に大知の勉強見てやれ。俺は手始めに如月の勉強見るから。ゆかりと陽平は自分で勉強できるな」

「分かりました。ほら大知、さつきの続きをから」

「分かつてるつて。あー、もうどうしてアルファベットつて一文字につき1音じやないんだよ！！」

ゆかりちゃんと陽ちゃんは黙々とペンを動かし始め、大ちゃんはときどき凜君に、「だから違うとさつきから言つてるだろ！」と怒られながらも自分の勉強をしている。1じこまで凜君を怒らせることができるのは、もう一種の才能だと思つ。うん。で、凜君はとくと、大ちゃんの勉強を見ながらも自分の前に広げたノートに何か難しげな数式を書き連ねている。……恐るべし、凜君。

「で、如月は何やるんだ？」

「一応英語と数学を持つてきました」

「んー、じゃあ……先に英語からやるか。他のやつらはしばらく質問でなさそうだし」

大地先生が一通りみんなのノートを覗き込んでから言った。大地先生はふと立ちあがって部屋から出ていくと、すぐに何やら分厚い本を持って戻ってきた。

「如月、基本的な構文は分かつてるな？ 最低限の英単語も」

「えと、受験勉強でやつたくらいなら」

「じゃあ……このページの問題やつてみる」

そう言つて大地先生は手に持つていた本の最初のほうのページを

開く。ざつと英文に目を通すと、なんとか書いてあることは分かりそうだ。

「これ、俺の大学のときの友人が書いたやつなんだけど、割と出来がいいんでこうして使つてるってわけ」

「先生のお友達ですか。すごく優秀な方なんでしょうね。私でも理解できそうです」

「まあな」

大地先生が少し照れくさそうに笑った。

それからしばらく大地先生に英語を教えてもらひ。そこでふと疑問を持った。……先生の担当って、確か古典だったよな。

そこで、問題が一区切りついたところで私は大地先生に聞いてみることにした。

「あの、先生。先生の担当教科って、古典ですよね？　他の教科も教えられるんですか？」

「あ、うん。まあな」

「そりなんだぜ、美月ちゃん！　大地さんってすっげえ頭いいんだ！」

急に興奮した大ちゃんが話に割り込んできた。それを今にも誰か（大ちゃん）を射殺しそうな目で見つめる凜君。しかし、興奮した大ちゃんはそれに気がつかない！

「俺、全教科ダメだから、全部大地さんに見てもらつたんだ。しかも全部分かりやすいんだぜ……」

「大知、人が説明しているのに他人の会話に入りこむとは……随分な余裕だね。じゃ、僕の説明もいらないよね？」

凜君、その黒いを通り越して闇のスマイルは超怖いです。大ちゃんなんか恐怖でガタガタ震え始めました。それを見たゆかりちゃんと陽ちゃんは爆笑しています。正直笑い事じゃないと思います。

「これ、ヒント無しで解いてじゅうよ。僕の説明はいらないんでしょ？」

そう言つて凜君が指差したのは今凜君が解いているのと同じようかなり複雑な数式。当然私の頭ではそれが何を表しているのかすら理解することはできません。

「すいません」めんなさいゆるしてください神様仏様凜様

たぶん自分でも何言つてるのか分かつてないんだろうな。そんな勢いで大ちゃんが土下座するから、元から爆笑していた2人に加え、大地先生もが大爆笑しだした。

「大知、Let's try.」

…完璧な発音Withブラックスマイル。かなり怖いです。

完璧に撃沈した大ちゃんが復活したのは、私が英語の問題を一通り解き終えて、数学の勉強に移る頃だった。

第1-1夜（前書き）

途中で自分が何書いてるのか分からなくなりました……。
今回ちよつと（かなり？）グダグダです。ごめんなさい。

「先生、次、数学なんんですけど……」

「ノート? どれ、見せて……」

私がおずおずと差し出したノートを受け取つてさうと田を通す遠峰先生。みるみる表情が引き締まっていく。

卷之三

遠峰先生は無言でノートを閉じて置くと、また無言で部屋を出て行つた。そして戻ってきたときに一緒に手に持つていたのは、また何やら分厚い本。

「予想外だつた。まさかここまでの大知のほかにもまだいたなんて。とりあえずお前はこつからここまでページ、全部やってみろ。簡単な計算問題だから分かるだろ？」

「えーと、12+3=……15?」(33)です。

というわけで私は遠峰先生に言われたページをひたすらせつせと解いていた。2時間ほど続けると、だんだん解くスピードが速くなってきた気がする。

その間、凜君やゆかりちゃんや陽ちゃんが遠峰先生に、

読者様ごめんなさい。私の中でつまく脳内変換できなくてこのよ

うな結果になってしまった。恨むなら私の馬鹿なこの脳を恨んでください。

何はともあれ、このよつな難しげな質問をしていた。

「そろそろ休憩にするか」

遠峰先生が、今にも（というかすでに）頭から湯気を出しそうな私と大ちゃんの様子を見たのか、休憩宣言をした。

その言葉に一斉に伸びをする私たち5人

「そうだ、これ、うちの姉貴から。勉強の息抜きに作ったから良ければ食べて、だつて」

「梓紗さんから!? やつた！」

一気にテンションが上がる私と大ちゃんを除く4人。何この異様なテンションの上がりよう。そして梓紗さんって誰?

私の疑問に気がついたのか、大ちゃんが説明してくれた。

「梓紗つていうのは俺の姉貴」

「梓紗さんのお菓子つて、すげーおいしいんだよ。美月も食べてみる?」

そう言つて陽ちゃんが差し出してくれたのは貝殻の形を模したお菓子、マドレーヌだ。黄金色に焼けたその菓子は、見るからにとてもおいしそうだ。

思わず唾をぐくと飲み込んでしまう。

「……いただきます」

陽ちゃんからマドレーヌを受け取って、一口食べてみる。瞬間、口の中に広がるバターの香りと、砂糖とは違うほのかな甘み。

「これは……、蜂蜜?」

「美月よく分かったな。そう、蜂蜜。姉貴、お菓子作る時は隠し味に蜂蜜使うのがこだわりなんだって。砂糖とは違う甘みがあるらしいんだけど、俺には正直分からん」

「そうか、やつぱりこの甘さは蜂蜜か。一人納得していると、田の前にもう一つマドレーヌが差し出された。顔を上げると、そこには阳ちゃん。

「美月、これ好きなんだろ。俺、甘いの苦手だし、良かつたら俺の分食えよ」

「そんな、悪いからいいよ。それに、阳ちゃんも食べてみたら? これなら食べられるかもよ」

「んー、食えないことはないんだけど、俺が食つより美月が食べたほうがいいかな、って思つて。美月、すごく幸せそうに食べてたら」

「なつ! ?」

顔が一瞬で真っ赤になる。私、そんな顔で食べてた! ? 確かに甘いものは好き。特に手作りのお菓子は作った人の気持ちが伝わってくるような気がして、特に好きだ。だからといって、人前で頬を緩ませるようなことはしてなかつたはずだ。

「私、頬緩んでた?」

「かなり」

「……見てた？」

「バツチリ」

恥ずかしさのあまり顔を俯かせてしまひ。まあ、女の子同士だったらこの幸せを共有できるし、なにせ同性だからまだ許せる。だけど陽ちゃんは男の子だ。異性にアホみたいに頬を緩ませているところを見られていたなんて、恥ずかしさで今なら死ねる。

「美月が幸せそつに食べてるといふ見たらひ、もつとあげたくなるんだよ。何故か。だから、俺の分も食べて？」

「……陽ちゃんって実は、タラシ？」

「なー? バカ、そんなつもりじゃ……」

「そうよね、陽ちゃんって結構罪作りな男なのよね~」

「わ、ゆかり! ? お前急に入つてくんじゃ……」

「あら、美月ちゃんと一人つきりで話してたかったの? 『ごめんなさいね~』

「そうじやない~! !

ゆかりちゃんが入つてきてくれたおかげで私はなんとか落ち着きを取り戻せたけど、陽ちゃんはまだゆかりちゃんにからかわれている。それを見ている外野男子3人も笑つて(大ちゃんは大爆笑)見ているだけで止めようともしない。

……陽ちゃん、だんだん涙目になつてきてるぞ。顔はもう真っ赤だし。ゆかりちゃん、そろそろやめたほうがいいんじゃ……。

とは思いつつも、陽ちゃんがこんなに「じられていく」というはなかなか見れないのによく見ておくべ」と云う。

「ゆかりの馬鹿! !

最後に陽ちゃんがゆかりちゃんにそう言つて部屋を飛び出していじりタイム終了。それを見た大ちゃんがさらに爆笑している。陽ちゃんの後ろ姿は、まるで少女漫画で『つわーんっ！』って言いながら走り去る女の子のようでした。結構おもしろかった。

「ゆかり、お前、もうちょっと手加減してやれよ。慰めに行くの、俺だぞ」「いいじゃん、仲いい証拠だよ」じゃ、大兄、あとは任せた「はこねー」

遠峰先生はやれやれ、とでも言つて阳ちゃんを追つて部屋を出て行った。

「ゆかり、ホントに男子には容赦ないよな」「そりやつ。僕も何度泣かされたことか」「え、凜君も?」「あなたは小2まででしょ。またすぐ可愛げがなくなっちゃつて」

凜君は小2のころから凜君だったのです。

第1-2夜（前書き）

試験：学生の敵。主に作者を始めとする勉強苦手組に多大なダメージを与える。

説教：お叱りの言葉。主に作者を始めとする勉強苦手組が両親からいたたくもの。

第12夜

「始め！」

先生の合図で一斉に紙をめくる音が響く。私もその中の一人で、少々緊張しながらも紙をめくる。

今日は月曜日で、今は1時間め。新入生歓迎テスト第1弾、英語だ。

大丈夫。土曜日にあんなに教えてもらつたんだから。自分にそう言い聞かせて紙にペンを走らせる。あ、意外にいけるかも。

回答欄を全て埋めて、顔を上げる。時計を確認すると、まだ10分も余っていた。これはすごいぞ。私、中学の時も時間なんて余つたこと無かつたのに。なんか感動。

残りの10分間、私は初めての見直しというものをやつてみた。今まで友人たちから話には聞いていたが、実際自分でやってみるのは初めてだ。

「止め」

先生の合図に私はまた顔を上げた。手こたえはあった。なかなかの出来だろう。余は満足じや。

なんて自分の中で一人芝居をしていると、不意に後ろから声をかけられた。

「よお、美月！ テストどうだった？」

「あ、4人とももう終わったの？ テストは結構いい感じかも」

「そりゃ良かつた。大地先生に教えてもらつて結果がどうなるか…」

…

そう言つて陽ちゃんが恐ろしげに身体を震わせた。そ、そんなに恐ろしいのか？ 陽ちゃんの後ろの3人に視線をやると、全員頷き返した。マジか。

「あははー、頑張つてよかつた……」

「あたしたちも仲間を失うことにならなくて良かつたわ」

そこまでなのか。ホントに良かつた、頑張つて。よくやつた、自分。

「次は国語だろ？ これ落としたら大変なことになるからな。あらかじめ言つておくけど」

「いやいやいや、もう遅いから。とりあえず善処します……」

「健闘を祈る」

言いたいことだけ言つて、4人はそれぞれの教室に帰つていった。脅すだけ脅して帰るなよ。

「席につけー。テスト始めるぞー」

2時間目の試験官が教室に入つてきて、騒がしかつた教室が一瞬さらに騒がしくなり、静まり返つた。緊張してるのつて、私だけじゃないんだろうな。そんなことを考えていたら、ちょっとだけ気持ちが軽くなつた。

「失礼します。何か質問ある人いるかー？」

テスト開始から十数分後、遠峰先生が教室に入ってきた。やつぱり国語担当教師。ちゃんと各教室を回っているようです。ゆっくりと教室内を回り、私の横を通り過ぎると、一瞬立ち止った。

「頑張れよ」

一瞬先生が開いて見せた手にはそう書いてあった。唖然として先生の後ろ姿を見つめる。いいのか？ 教師がこんなことして。巣鳳とかで訴えられるんじゃ……。ま、私から言つことはないけどね。

「ホント自由だなー、ここの学校」

テスト中だというのに思わずポロリといぼしてしまひ。試験官の先生に怪訝そうな目で見られる。おっと、いけないいけない。先生に何もありません、とでも言つよつに首を振つてみせてから、またテスト用紙に視線を戻す。

国語も何とか見直しが出来る時間を残して解き終わり、なかなかの出来だった。……と思つ。

「みーつきー！」

「毎回毎回、来んなーー！」

テスト用紙が回収し終わり、試験官が出ていくとほぼ同時に陽ちゃんが教室に飛び込んできた。

「美月ー、俺、俺……！」

「あー、はいはい。何かしくじったのね。後で大兄にたっぷりしぶられなさい」

「ゆかりー！ お前はそう言つたどな、大地先生って怒るとめちゃく

「ちや怖いんだぞ！！」

陽ちゃんは理系なのかな？ 何でもできるように見えたけど、苦手教科もちゃんとあつたんだな。よかつた……のか？ とりあえず陽ちゃんのお説教は決定したようです。私ひとりじゃなくてよかつたあ。

「……美月、お前なんでそんなに嬉しそうなんだよ」

無意識に頬が緩んでいたらしく、陽ちゃんに軽く睨まれる。

「いや、怒られるの私だけじゃなくなつたかも、って思つたらちょっと嬉しくて」

「そこ喜ぶとこじやねえだろ！ 言つとくがな、大地先生は国語に関するては特に厳しいんだからなーー！」

「そうそう。陽ちゃんは典型的な理系だからよく大兄にしぼられてたわね」

「いいよな、ゆかりは。文系だし」

「一応僕も理系なんだけど？」

「お前は次元が違うだろ？ がーー！」

凜君の言葉に即座に突つ込みを入れる陽ちゃん。こりや相当荒れてるな。そんな陽ちゃんの肩を叩いて大ちゃんが（余計な）ことを言った。

「大丈夫！ 僕も一緒に怒られるからー！」
「何が大丈夫なんだよーー！」

はい。これにはさすがの私と凜君も大爆笑。ゆかりちゃんのなんか笑いすぎておなか抱えて逆に苦しそう。ここまで笑う人、初めて

みたかも。

「ほーりー。後ろにたまつてゐる4人！　自分のクラスに戻れー」

次の数学の試験官として教室に入ってきたのは噂の遠峰先生だつた。いかにもだるそーにテスト用紙を抱えている。

「じゃあね、美月ちゃん。残り数学もがんばりましょ」

「うん。ありがと」

ゆかりちゃんが男子3人を引き連れて教室を出て行つた。テスト用紙が配られて、ふと教室の前、遠峰先生を見た。あれ、手の文字、消えてる。いつたいつの間に消したんだ。

「んじゃ、始めるぞー。お前ら準備いいな？　始め

いかにも俺面倒臭い、やる氣無い、とでもいいたそつた声でテスト開始の合図をし、教卓の前の椅子に座りこんで何やらペンを動かしている。

「ああ、もうマルつけてるんだ」

「どうか、そこで丸つけしてていいのか？　見えるんじゃないかな？」と思つたが、そうだ、この学校は適當だったということを思い出して、一人納得。

田の前の解答用紙を埋めることに集中した。

第12夜（後書き）

季節性ないな……。未だに美月たちは春です。初々しいです。羨ましいです。

そんな事を思う今日この頃です。

第1-3夜（前書き）

クリスマスが近い。だがまだ春だ！！
真冬に春の物語をお楽しみください　www

はーるがきーたー　はーるがきーたー　ビーーにー　きたー？

第13夜

「んじゃ、テスト返すぞー」「もうー?」「

担任の遠峰先生が教室に入ってくるなりこんなことを言つ出したのは、テストがあつたその日。もう丸つけ終わらせたのかよ!? そう思つたのは私だけではなかつたらしく、クラス全員の声がきれいにハモつた。

「だつて、授業のときとか返すのめんどいじゃん。今ならぱぱっと返してそのまま帰らせられるから。俺、授業とか時間とられるの嫌だし」

いやいやいや、他のクラスは授業のときに返さなきゃいけないでしううが。しかしそんなことはお構いなし。せっかくテストを返し始めた。

「おーい、次、如月ー」「あ、はい!

私は如月だから意外と早く順番が回つてくる。ぼーっとしてる間もなく名前が呼ばれる。

「ほー。よく頑張ったな

そう言つて笑顔で返される答案。よかつたあ。お咎めは無しみたい。

自分の答案に視線を落とすと、そこには96の数字。うん。まあ

まあかな。どうスつたんだろ？

「んじゃ、模範解答配るから全員席につけ。ちなみに今回のクラス平均は68。クラストップは96だ。採点ススとかあつたら持つてこい」

……ん？ 今、なんと言つた？ クラストップ、96？ ……私が！？

「みーつきーー。どうだつたー？」

「うわ、すげー！」

やう声がして慌てて顔を上げると、そこに私は手元を覗き込んでいる陽ちゃんとゆかりちゃん。その視線の先には……私の答案……

「うわ、ちょっと見ないで……」

「いいじゅん。すげいいい点数でしょ、それ

「うん……。クラストップだつて」

「クラストップ！？ 美月ちゃん、勉強できるじゃない」

ゆかりちゃんが大袈裟に驚いて見せる。そりゃ私もクラストップなんて初めてだからびっくりしてるけど。

「セー、答えこうだよ」

やう言つて私の間違えた漢字を書いて見せてくれてこるのは凜君。その後ろには引きずられてきたのである、大ちゃん。たぶん同じように何かしらのテストが返されたのだ。その顔は蒼通り越して白い。どんだけ悪かったんだ、この人。

「あ、そこそろ書くんだ……。ちなみに凜君は？」
「うーん、この答案見る限り、満点じゃない?」

「流石……」

さらりと満点宣言ですか。流石です。流石としか言いよつがありません。陽ちゃんはといつと、模範解答を睨みつけて、必死に何やら計算しているようだ。

「あー……後2点足りなかつた……」
「な、何が!?」

陽ちゃんがいきなり大きい声出すからびっくりしちゃつたじゃないか。しかも何だ、その今にも世界が滅ぶとでも言いたそうな声は。

「基準だよ。大地さんの。今回のテストでは65点以上で合格なんだって。それ未満はお説教」

「へえ、そうなんだ。大変だね」

「大変どころじゃないって。ホントに怖いんだから。特に国語は。

……あー、今からもう足が震えてる」

そんなに? 後ろを振り返ると、大ちゃんも同じように自分の身体を抱きかかえて震えている。

「大知、お前も?」
「うん。しかも俺、国語8点も足らない。かなりやばい」
「あんたらいくらしぼられても懲りないからね。大人しく大兄の補習受けてきなさい」

あれ? お説教って補習なの? 遠峰先生教えるの上手だし、そんなに怖がることじやないと思つんだけど……。

そんな私の疑問が顔に出たのか、ゆかりちゃんが説明してくれた。

「大兄はね、一回田とか、テスト前とかはきちんと丁寧に優しく教えるの。でもね、テストでちゃんと教えたことが出来てなかつたり、努力を怠つたりすると、すんごいスバルタになるのよ」

「僕も一回だけ受けたことあるけど、なんて言つのかな、ただ怒鳴り散らすんじやなくて、そのオーラとこいつが気配というか、がめちやくひや怖い」

凜君が受けたことあるんだ。そこが一番驚きです。

「やうやう。中学の初めてのテストのときね。凜君、あれで懲りて勉強きちんとするよになつたんでしょ？」

「うう。もう2度とあんなの受けたくないもん」

「怖……。マジで怖。凜君がここまで頭が良くなるきっかけになつたつて、どんだけ怖いんだよ。

「その時ね、大地さんに言われたんだよ。僕はやればやるだけ伸びるつて。大知なんかはただ頭はたかれながら問題解かれまくつたけどね」

凜君が懐かしそうに笑う。その時は怖くても、今となつてはいい思い出なのだ。

「それから少し勉強真面目にやうやくなつてから、今みたいになつた。もともと僕、勉強嫌いじやないし。何か一度真剣に向かい合つたら面白くなつちやつて」

結局ただの天才か！！

「大兄に伸びるって言われただけでここまで伸びたんだから、凜ちゃんもすごいわよねえ」

「同感。ただの天才じゃん」

「別に。好きこそもの上手なれ、ってことじゃない？」

勉強が好きか。私にはとてもじゃないけど無理だな。でもやうやつて好きでやれるのって羨ましいと思う。どうせ同じようにやらなければいけないなら、好きで樂しいほうがいいに決まってる。

「どうやつたら勉強なんて好きになれるのかね……」

「どうつて、考えたことないな……。気が付いたら楽しかったし……」

私の独り言のつもりだったのに、凜君が真剣に考え始めてくれた。その横顔が少しがつこよくてドキッとした。あれ、最近の私、ちょっと変だな。

「みつやー。俺、俺だけじゃね」

まだ悩んでたのか、2人とも。すっかり忘れてた。

第1-3夜（後書き）

やーまんあーたー やーとんあーたー イーイーイーあたー
W W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4142x/>

月好きの日常

2011年12月1日22時56分発行